

令和元年度 全国剣道指導者研修会（九州ブロック・熊本県）



体ほぐしの運動：パートナーを探せ



剣道の要素を感じ取らせる遊びの体験：ボール打ち

令和元年度全国剣道指導者研修会 九州ブロック・熊本県（主催=日本武道館、全日本剣道連盟、全日本学校剣道連盟、主管=熊本県学校剣道連盟）は、1月25日と26日の2日間、熊本市総合体育館・青年会館大体育館で中学校保健体育科教員32名を含む77名が参加して行われた。本事業は平成24年度から完全実施された中学校保健体育科における武道授業の充実に向けて、剣道の授業が効果的に展開されるよう、全国9ブロックのうち、毎年5ブロックで実施しており、本年度の最後の開催となった。また、次年度からは、東日本と西日本の2ブロックで実施するため、平成22年度から5ブロックで開催してきた本研修会は今回で最後となった。

■1日目（1月25日）

開講式では、はじめに中島昭博 日本武道館振興課長が「本研修会は、中学校武道授業における剣道の充実と効果的な指導が展開されることを目的としている。本研修会において、指導力の向上を図るとともに、一人でも多くの中学生に剣道の楽しさや素晴らしさを伝えていただききたい」と挨拶。

続いて、福本修二 全日本剣道連盟副会長が「主催三者が一体となって全国9ブロックで開催してきた本研修会は、ここ熊本県が47都道府県の最後の開催となった。皆さんの力により、剣道がいかに子供たちにとって価値ある教科として取り上げられるかということを期待するとともに、これを推進していかなければならない」と述べた。主管県からは栗崎敬一 熊本県学校剣道連盟会長が「熊本県では、すべての学校で武道が実際されており、剣道を履修している学校は、県内では約50%、市内では約60%となっている。本研修会で学んだことを現場に持ち帰り、生かしていただきたい」と歓迎の言葉を述べた。



開講式終了後、福本講師による講義「中学校保健体育における武道（剣道）の学習について」が行なわれた。教育とは「与え、引き出し、育てる」ことであり、これを念頭に入れた上で、指導者は①個人に応じた指導、②スキルに応じた指導、③言語による指導、④運動感覚的指導を分かりやすく指導する必要がある。さらに精神的作用（褒めること）を加えて、剣道を初めて学ぶ人にもその素晴らしさが伝えられるよう、示範してほしいと結んだ。

次に、講義「安全指導について」では、吉田泰将講師が、事故防止の観点からも、用具の安全管理は、指導者だけでなく生徒自身も点検ができるように周知させる必要があることを説明した。

続いて、講義「体罰・暴力によらない指導」では、佐藤義則講師から、褒める指導とは個人の能力を褒めるのではなく、努力を評価することであり、過剰な褒めすぎは良くない。一方、叱る場合には、人間性を叱るのではなく、行動を叱ることが大切であるということを示した。指導者は周りに惑わされることなく、学校教育法11条を噛みしめて指導してほしいと説いた。

その後、梅北嘉郎 荒尾市立荒尾第三中学校教諭による「剣道授業実践発表」が行われ、剣道授業によるつまづきを克服するため、アンケートの実施や教材の工夫を紹介。また、教具の工夫では、剣道具の装着時間短縮のため、手拭の代わりにスイムキャップとミニタオルの使用例が紹介された。

昼食後は、「剣道授業における楽しい動機付け」として、軽米満世講師が「剣道の歴史と特性」の解説。その後、山神真一講師が体ほぐしの運動として「じゃんけんゲーム」や「手拭いゲーム」を紹介。これらのゲームには、攻防の楽しさや、大きな発声、また相手を思いやる気持ちなどを体得できる目的があることを実践した。そして、剣道の要素を感じ取らせる遊びの体験では、有田祐二講師が「新聞紙切り」や「新聞球打ち」、「ボール打ち」などを紹介して、剣道の動作

を楽しく体験できる運動を行った。

次に、「剣道に必要な動きづくり」を軽米講師が行い、大きな発声こそが1本につながるが、そのためには気迫が重要であることを説明。また、踏み込みや足さばき、目付や残心など、剣道の基本動作を身に付けるための練習方法を紹介した。

続いて、剣道具のない授業例として「礼法」を下諸純孝講師が行った。礼とは、相手に対する尊敬や思いやりがあってこそその礼であり、日常生活においてもこれがしっかりできる人は、第三者にも好印象を与えることができると改めて礼の重要性を説いた上で、剣道における礼の角度や目線など、立礼と座礼の動作を全員で実践した。

その後、神崎浩講師が「木刀による剣道基本技稽古法」を紹介。制定の理由や木刀の名称、相手の動きに応じた基本動作を説明した。空間打突では「見構え・気構え・心構え」の重要性を確認し、一斉指導から対人による練習、さらに「基本1～5」までを段階的に実践した。

その後、「木刀による剣道基本技稽古法」を教材として、主体的で対話的な深い学びを目指し、班別によるグループ発表を行った。初心者にとって寸止めの距離感や物打^{ものうち}の位置が難しいという意見が出された班では、「安全に空間打突を学ぶ」というテーマのもと、木刀の物打部分に丸めた新聞紙を取り付けて、寸止めに体得させる練習方法を発表した。



初日最後の研究協議では、「剣道授業の現状と課題」をテーマに各グループで協議。用具が揃えられない場合の工夫や防具の付け外しの時間短縮のための工夫、大きな声を出すための工夫などが紹介された。

■1月26日(日)

剣道具のない授業例として、山神講師、吉田講師、下諸講師による「竹刀を用いた打ち方、打たせ方の指導」を実践した。下諸講師からは、女子生徒の中には相手が竹刀を振り上げると怖がってしまう者もいるので、剣道が嫌いにならないように段階的に指導する

ことの大切さを説いた。続いて、佐藤講師が音楽を活用した授業例として、リズム剣道を紹介。リズム剣道には、基本技の習得だけでなく、剣道に興味・関心を持ち、楽しいと思ってもらえる要素が含まれていることを紹介。グループ学習の後、発表会を行った。

次に「剣道具のある授業例」として、神崎講師、有田講師により、実際に防具を着けて相手の動作に応じた基本動作の習得を実践した。防具を着けて打ち合えば痛みを伴うこともあるので、単純な動きから複雑な動き、軽い力から大きな力など、ここでも段階的に指導することの大切さを説いた。その後、山田博子講師より、ごく簡単な試合として「気・剣・体の一致」を意識した判定試合を紹介。3人の審判がそれぞれ気・剣・体を意識して見ることで、判定の目付を明確にできること、また判定の後にはどこが良かったのか話し合いの場を持ち、具体的に評価を言えるようになることが重要であると説明した。

午後も引き続き、ごく簡単な試合として、応じ技による判定試合を行った後、山神講師による約束練習として、鍔迫り合いから引き胴、面抜き胴、残心までの応用を行った。山神講師からは、約束練習は攻防の楽しさを体得してもらうための練習として有効であること、また抜き胴は音がしっかり鳴るので、初心者にとっても分かりやすく、早い段階から取り入れた方が良くも助言があった。その後、自由稽古とポイント制を用いた簡易な試合を行い、最後に防具の結束に触れて実技は終了した。

研修最後は、山田講師による講義「指導と評価」が行われた。学習評価における観点として、一定の学習期間と評価期間を設定する評価基準と、指導から期間を置かず評価する基準があるので、使い分けのようにすること、また個人の潜在能力だけで評価するのではなく、指導と評価の一体化を心がけることなど、評価の際のポイントが示された。

閉講式では、軽米講師より「授業において、分からなかったことやできなかつたことができるようになる喜びは、生徒だけでなく指導者の喜びでもあり、この経験が指導者の質を高め、子供の幸せにもつながる。



日本の伝統文化である剣道の学びをとおして、子供たちの生きる力の一助になることを願っている」と講評があった。続いて坂本健志朗 阿蘇市立波野中学校教諭が講師への謝辞を述べ、古舘伸尋 熊本県学校剣道連盟副会長が主管県挨拶。福本講師が主催者挨拶を行い、全日程が終了した。